

青年期から老年期に至るアイデンティティの変容

— 高齢者の語りの分析から —

深瀬 裕子・岡本 祐子

(2011年10月6日受理)

The Process of Identity Formation from Adolescence to Old Age
— An analysis based on the recollections of elderly people —

Yuko Fukase and Yuko Okamoto

Abstract: This study draws on data from interviews with individuals aged 65 to 86 ($n = 20$) to examine the developmental pathways of identity formed from adolescence to seniority and to especially investigate elderly identity. The main findings were as follows. In adolescence, we did not find “identity achievement”. Identity achievement was found to occur after adolescence in this study. The theme of a young adult’s identity was how to commit to a new role. If they had not sought out and committed to their own course in adolescence, they were almost at the same status of identity achievement as that of a young adult after having strove for a new role. In the elderly, changes in identity due to the loss of the familiar, occupation, and health and the regret that they did not seek out and commit to their own course in adolescence. In addition, aging and death were structural factors for identity in the elderly, which were distinguished from the awareness of physical and social changes that occurs during middle age.

Key words: old age, identity, E. H. Erikson, changing process

キーワード：老年期、アイデンティティ、E. H. エリクソン、変容過程

問題と目的

アイデンティティとは、自分是他者と違って自分であるという感覚と、自分はこれまでいかにして自分であったのかという感覚である (Erikson, 1950 仁科訳 1977, 1980)。アイデンティティに関する研究は、アイデンティティの問題への対処の仕方によって類型するアイデンティティ・ステータス論や (Marcia, 1966; 無藤, 1979)、達成の度合いを量的に捉えようとする尺度の作成などが行われている (宮下, 1987; 中西・佐方, 2001; Rasmussen, 1964; 谷, 2001)。例えばアイデンティティ・ステータス論では、自分にとって意味のある可能性について迷い決定しようと苦闘する危機の有無と、自分の信念を明確に表現しそれに基づいて行動する傾倒の程度により、アイデンティティ達成、モラ

トリウム、早期完了、アイデンティティ拡散に類型する (Marcia, 1966; 無藤, 1979)。

さて、アイデンティティは職業選択や第2次性徴を経験する青年期に顕著となる心理社会的課題であるが、人間発達の中核的テーマであると考えられ、対象は成人前期、中年期さらには老年期にまで広がっている。これらの研究により、アイデンティティが生涯発達のテーマであるという認識は、多くの研究者に共有されている (岡本, 1994)。

では老年期のアイデンティティはどのような特質を有するのか。Erikson, Erikson, & Kivnick (1986 朝長他訳 1990) によれば、高齢者は“何十年と生きてきた自己、現在に生きている自己、そして不確かな未来に生き続けるであろう自己の意味を理解しようとすること (p.137)”によって、アイデンティティ達成とア

アイデンティティ拡散のバランスをとる作業を行う。さらに、Peck (1955) は、老年期のアイデンティティの課題をより具体的に、①引退の危機、②身体的健康の危機、③死の危機として論じた。また、内的・外的な変化が起こる中で、自分らしさの感覚を持ち続けることと、これらの変化に固執することの葛藤があることも報告されている(深瀬・岡本, 2010a)。

以下、Peck (1955) の示した3つの危機に基づいて老年期のアイデンティティ研究を概観する。まず引退の危機としては、岡本・山本 (1985) がアイデンティティ・ステータス論に準じ、定年退職という危機と、定年退職後の生活への関わり方による類型を行い、初老期のアイデンティティ再確立に関するプロセスを捉えている。また、定年退職期に、職業を失うことや残された人生の短さにとらわれることなく、自分らしい時間を過ごすことがアイデンティティを表現することにつながり、生活満足度が高くなることも報告されている (Ogilvie, 1987)。

次に、身体的健康の危機としては、病への不安が非常に重大な危機であるという指摘がある (Brorsson, Lindbladh, & Råstam, 1998)。一方で、身体的問題だけでなく、ライフスタイルやアイデンティティ全体に目を向けることが、治療上は必要になるとも示唆されている (Harris, 1975)。

死の危機としては、時間的展望の狭まりや死の認知とアイデンティティの関連が検討されてきた (Hulbert & Lens, 1988; 岡本, 1990)。また、自己のあり方に関連して、他者から「年より」というラベルを付けられることが、アイデンティティを揺るがす体験に繋がるなど、年齢アイデンティティに関する知見もある (Berger, 2006)。

本研究の目的

以上のように、老年期には社会的変化と身体的変化に伴うアイデンティティの揺らぎ、死や時間的展望の狭まりという、自己のあり方の根本を揺るがすような危機を体験することが示されている。したがって、老年期におけるアイデンティティの変容やその要因を捉えることは重要な課題である。そこで本研究では、高齢者の語りの分析を行い、青年期から老年期に至るアイデンティティに関する内的テーマの変容過程を検討することを目的とする。

方 法

対象者¹⁾

高齢者大学や筆者の知人を通じて募った65-86歳の在宅で生活する高齢者20名 (男性11名, 女性9名。平

均年齢74.2歳)。対象者のプロフィールを Table 1 に示した。

Table 1
対象者のプロフィール

対象者 No.	年齢	性	最終学歴	主な職歴	現職
A	86	女	青年学校	専業主婦	無職
B	82	女	女子専門学校	専業主婦	無職
C	81	男	小学校尋常科	会社員	無職
D	80	男	大学	会社員	無職
E	77	女	小学校高等科	農業	無職
F	77	男	大学	公務員-教員	嘱託
G	77	男	大学	会社員	無職
H	76	女	国民学校高等科	調理(パート)	無職
I	75	女	青年学校	農業	農業
J	75	男	実業学校	会社員	無職
K	74	男	高等学校	自衛隊	無職
L	73	女	大学	看護師-教員	無職
M	73	男	大学	教員, 自営	自営
N	71	男	高等学校	会社員	無職
O	70	女	中学校	専業主婦	無職
P	69	男	高等学校	会社員	嘱託
Q	68	女	高等学校	事務(パート)	無職
R	68	女	高等学校	事務(パート)	無職
S	66	男	高等学校	会社員	無職
T	65	男	大学	会社員-教員	嘱託

調査手続きと調査内容¹⁾

個別の半構造化面接を実施した。調査は対象者が指定する場所 (大学の調査室, 対象者の自宅など) で行い、研究内容を説明し、結果の公表について署名で同意を得た上で内容を録音した。調査場面では、対象者の生活歴を聞いた後、①自分がどういった人間か、②それはどこから感じるものか、③自分らしさの変化について質問した。面接時間は合計120分-300分であった。なおこの調査は広島大学大学院教育学研究科倫理審査委員会の承認を得ている。

分析方法

発達段階に基づいてカテゴリを生成する手続きは松本 (2009) を、得られたカテゴリから変容モデルを作成する手続きは小嶋 (2004) を参考に、以下の分析を行った。①逐語記録から、過去を含めて、アイデンティティに関する語りを抽出した。②抽出した語りを発達段階ごとに整理した表を作成した。③アイデンティティについてよく語られている5名の表 (A, E, J, Q, T) を用い、各語りにアイデンティティの視点から初期コードを付与した。④発達段階ごとに初期コードを比較し、下位カテゴリにグルーピングした。⑤同様の意味内容と考えられる下位カテゴリをグルーピングし、上位カテゴリを生成した。⑥残りの15名の語りを、

Table 2-1
青年期から老年期に至るアイデンティティのカテゴリ

発達段階	上位カテゴリとその概要 人数: 対象者 No.	下位カテゴリ 人数: 対象者 No.	語りの例 (対象者 No.)
青年期	《生き方の模索》 自分らしい生き方を模索, 挫折, 修正する。 n=9: C, D, F, G, J, L, M, P, T	〈自分らしい生き方を模索する〉 n=5: F, G, M, P, T	「当時の実業高校なんて大したことないし。だったら大学に行きたいって思っただけで、お金を貯めながら、自分で勉強してね。それで大学を受けて。」(G)
		〈目指した進路に挫折する〉 n=3: F, M, T	ある職業を目指したが、「勉強したんですが、やっぱりプロになるレベルじゃないなと思って、やめたんです。」(T)
		〈自分らしい進路に修正する〉 n=6: C, D, J, L, P, T	「勤めてただけで、ここにいたら何か中途半端になるなって思っただけで、大学に行こうと思って。」(D)
	《外的要因による決定》 文化や環境の要因により進路を半ば強制的に決定する。 n=13: A, B, C, E, G, H, I, J, L, O, P, R, T	〈外的要因で進路を決定する〉 n=5: A, B, E, I, J	「戦争中でしょう。男の人が少なくてね、『いい人がいるから』ということで結婚したの。」(A)
		〈外的要因で進路を断念する〉 n=10: B, C, G, H, I, L, O, P, R, T	「私は中学まで。終戦後で、家族も多すぎて、苦しかったからね。上の学校に行けなかった時は泣きましたよ。」(H)
	《早期完了的》 模索なく、進路決定する。 n=4: D, K, N, S	—	就職の理由は「まあ、なんとなく入ってみようかなと。」(K)
成人前期	《役割獲得への努力》 社会人, 家庭人という新たな役割に没頭し, 役割獲得に励む様態。 n=16: A, B, D, E, F, G, H, J, K, L, M, N, P, Q, S, T	〈一から自分を作り上げる〉 n=6: A, B, G, H, J, L	「営業のつもりで入社したんですけど、技術をやってくれないかって言われて、それでそこで一からやって。」(J)
		〈家族を守るために努力する〉 n=7: E, H, J, K, N, P, Q	「仕事で頭にくることがあっても、「辞めたら生活が成り立たない」って思っただけで頑張った。かなり無理して。」(J)
		〈新しい役割獲得に励む〉 n=8: B, D, E, F, H, M, S, T	「一番鍛えられたのは転勤ですね。体に小さいだけでもが出来たし。社会人として一番勉強になった。」(S)
	《自分らしさの発揮》 社会人, 家庭人という新たな役割を習得したり, 力を発揮する。 n=8: A, B, G, J, L, O, P, T	〈一人前になる〉 n=4: G, J, P, T	「新しい仕組みを学んでたら、それで噂になったのか、プロジェクトの立ち上げに行かないかって言われて。」(G)
		〈子育て・教育に力を注ぐ〉 n=5: A, B, L, O, T	「子どもが産まれて、お金ないけど、そうした方がいいだろうって。それは頑張りましたね。」(O)
	《惰性的な役割獲得》 新たな役割に主体的な取り組みがない。 n=4: K, N, Q, S	—	転職したが「3 か月で辞めて元の会社に戻って。元の会社は縁故でしたから、私も甘えがあった。」(N)

⑤で生成したカテゴリに分類し、アイデンティティに関するカテゴリを精緻化した。⑦信頼性を検討するため、臨床心理学を専攻する大学院生1名が評定を行った。なお、分類が一致しない場合は、分析者（第一著者）と協議の上、分類を決定した。⑧最終的に得られた上位カテゴリを、時系列に沿って分析し、青年期から老年期に至るアイデンティティの変容モデルを作成した。

結果

発達段階ごとのアイデンティティに関するカテゴリ

アイデンティティに関する語りの総数177個に対し、分析①-⑦を行い、上位カテゴリ16個、下位カテゴリ29個（うち5個は上位カテゴリと重複している）が生成された（Table 2-1, 2-2）。評定者間一致率は、青年期の上位カテゴリが85.3%、下位カテゴリが89.7%、成人前期の上位カテゴリが91.2%、下位カテゴリが87.1%、中年期の上位カテゴリが81.6%、下位カテ

ゴリが83.9%、老年期の上位カテゴリが85.9%、下位カテゴリが86.9%であった。

青年期のアイデンティティに関する上位カテゴリとして《生き方の模索》《外的要因による決定》《早期完了的》の3個が生成された。《外的要因による決定》は、〈外的要因で進路を決定する〉〈外的要因で進路を断念する〉の下位カテゴリから構成されており、自身の要求が求められずに決定された、なかば強制的な進路選択の様態であった。ここで示された外的要因は、家庭の経済状態や見合い結婚の習慣など、文化や環境といった要因であった。一方《早期完了的》は、文化や環境の影響は少ないにもかかわらず、進路選択にほとんど模索を行わなかった様態であった。

アイデンティティ・ステータス (Marcia, 1966; 無藤, 1979) と照合すると、《生き方の模索》は危機と傾倒の一部を含んでいることから、アイデンティティ達成と類似していた。また、《早期完了的》は危機も傾倒もしていないことから早期完了と同等の様態であると考えられた。しかし本研究では、モラトリアムや

Table 2-2
青年期から老年期に至るアイデンティティのカテゴリ (つづき)

発達段階	上位カテゴリとその概要 人数: 対象者 No.	下位カテゴリ 人数: 対象者 No.	語りの例 (対象者 No.)
中年期	《自分らしさへの充実感》 自分らしさに没頭し誇りを持ち楽しむ。 n=14: A, B, C, D, F, G, H, I, J, O, P, Q, R, S	〈役割に没頭〉 n=8: A, F, G, H, J, P, Q, R	「母が倒れた時、祖母の入院が重なってね。私はまだ若かったから元気はつらつて介護してた。」(Q)
		〈役割への誇り〉 n=11: A, B, C, D, F, G, I, J, O, Q, S	「私は頑張った男なんですよね。会社でもまもなく支店長で、定年後も皆をリードする立場にいましたからね。」(D)
	《連続性の実感》 変化を体験しても、それ以前からの自分らしさを失わないようにする。 n=4: J, K, M, T	〈変わらない自分らしさを実感〉 n=3: J, K, T	「僕がいなくても困らないように技術的なことを教える。やっぱり、(前の職場からの学びで)上官が倒れた時、他の者が出来るように指導するのが上司だって思うから。」(K)
		〈自分らしさを失わない努力〉 n=1: M	「病気で言葉が出にくくなったが、「詩集をゆっくり読んで、慣らして。出来るようになってから少しずつ。」(M)
	《内的・外的変化》 社会的、身体的な変化を実感する。 n=9: D, F, H, J, K, L, M, N, T	〈自ら変化を起こす〉 n=4: F, J, L, T	「もう十分(働いた)かなと思った。(それで次は)新しいところで自分色の仕事をしたいって思ったの。」(L)
		〈突然の危機〉 n=7: D, H, J, K, L, M, N	「病気で声が出なかった時は「すぐくショックで、病院の上から飛びおろしようと思ったくらいです。」(M)
《役割への不安全感》 力を発揮できなかったと後悔する。 n=4: A, D, N, O	—	「長男は(良い高校に入ったのに)理想と違った。うちは(夫が)公務員だから参観日にも行けなくて、あの時、主人も一緒だったら良かったんじゃないかなって。」(A)	
老年期	《喪失を意識》 関係性や社会的な役割が変化したことを意識する。 n=10: A, B, D, F, H, J, M, N, P, Q	〈関係・役割を喪失する〉 n=3: J, N, P	「現役を退くことで、置いて行かれるような感じがして。周りからはあなたは要りませんよって言われるような。」(P)
		〈身体的な変化を自覚する〉 n=7: A, B, D, F, H, M, Q	「記憶力とか理解力がなくなってきたね。頭が古くなってから。」(B)
	《変化する自分を受け入れる》 老化や社会的役割によって変化する自分について考える。 n=9: G, K, L, O, P, Q, R, S, T	〈新しい自分らしさの獲得〉 n=6: G, K, O, Q, R, T	「60歳まで働いてたから、その後になにかしたいと思うようになったわね。」(O)
		〈自分らしさの一新〉 n=4: L, P, R, S	「定年してから、することが180度変わったような気がする。もう他の事がしたいって。」(S)
	《自分らしさを取り戻す》 過去の後悔・葛藤に取り組み、折り合おうとする。 n=13: B, C, D, E, G, H, I, J, M, P, Q, R, S	〈後悔に今取り組む〉 n=5: G, M, Q, R, S	「定年して地域に貢献したいって。昔、地域のボランティアをやってたけど、いつの間になくなってたから。」(S)
		〈過去の葛藤に折り合う〉 n=9: B, C, D, E, H, I, J, P, S	「辛いこととか問題もあったけど、振り返ってみると、満足感から言ったら、良かったなって。」(P)
	《確固たる自分らしさ》 変化しない部分を見て、それをもち続けていることに肯定的意味づけをする。 n=10: A, F, G, J, K, L, M, N, Q, T	〈過去の自分を誇りに思う〉 n=5: F, J, K, M, Q	「仕事は「充実」はしてた。頼りにされてたし、大事にされてたってことはありますね。」(Q)
		〈自分の核をもち続ける〉 n=8: A, F, G, K, L, M, N, T	「真面目に一生懸命に生きようとしたことは、変わってないと思うんですね。そういう点は変わってない。」(G)
《取り戻せない自分らしさへの固執》 過去の後悔・葛藤に固執し、自分を誇りに思えない。 n=7: D, E, H, K, L, Q, R	—	「義務教育しか出てないから悔しい。自分なりにもう少し出来たんじゃないかって。何か一つでも「これ」って言うものを身につけておけばよかった。」(H)	
《老いる自分への不安》 将来の老化や死に不安を募らせる。 n=12: B, D, E, H, I, J, K, M, O, P, Q, R	—	「病気をしなかったらこの生活が続きますよね。やっぱり今は病気が一番怖いよね。」(D)	

アイデンティティ拡散に類似した様態は認められず、また《外的要因による決定》は危機と傾倒による説明が困難であった。

成人前期には《役割獲得への努力》《自分らしさの発揮》《情性的な役割獲得》の3個の上位カテゴリが生成された。《情性的な役割獲得》は、社会人あるいは家庭人としての新たな役割を獲得する際に、主体的な取り組みを行わなかった様態であった。したがって、新たな役割の獲得に没頭し、努力し、励むといった《役

割獲得への努力》と対概念であると考えられた。

中年期には《自分らしさへの充実感》《連続性の実感》《内的・外的変化》《役割への不安全感》の4個の上位カテゴリが生成された。《内的・外的変化》は、自ら決意して転職する〈自ら変化を起こす〉と、大病や近親者の突然の死といった外から受ける変化による〈突然の危機〉の2個の下位カテゴリで構成された。また《連続性の実感》は、危機に際して、それ以前から続く自分らしさを実感し、あるいは自分らしさを失わないよ

うに努力することで、自己の連続性を保とうとする様態であった。

老年期には《喪失を意識》《変化する自分を受け入れる》《自分らしさを取り戻す》《確固たる自分らしさ》《取り戻せない自分らしさへの固執》《老いる自分への不安》の6個の上位カテゴリが生成された。《喪失を意識》は、現役引退に関する〈関係・役割を喪失する〉と、徐々に心身機能が低下することに関する〈身体的な変化を自覚する〉の2個の下位カテゴリから構成された。中年期の《内的・外的変化》が、転職あるいは突然の大病という中年期の課題であるのに対し、老年期の《喪失を意識》は、定年退職や心身機能の老化に関連しており、この点で2個の上位カテゴリは区別された。

また、《変化する自分を受け入れる》は、現役引退後の自分のあり方を考える〈新しい自分らしさの獲得〉と〈自分らしさの一新〉の2個の下位カテゴリから構成された。一方、《確固たる自分らしさ》は、幼少期から初老期までの自分らしさに着目するという点で、

《変化する自分を受け入れる》よりも長期的な意味が含まれていた。以上から、《変化する自分を受け入れる》は、中年期からの過渡に関する様態であり、《確固たる自分らしさ》はその後に見られる様態であると考えられた。

さらに、《老いる自分への不安》は、将来、自分が重篤な変化を体験することや、それに伴う自己の死という未知の体験に対する不安であり、《喪失を意識》よりも、自分の老化や死を具体的に捉え、深い悩みや不安を抱く様態であった。

アイデンティティの変容モデル

以上、16個の上位カテゴリを対象者の推移に基づいて分析し (Table 3)、青年期から老年期に至るアイデンティティの変容モデルを作成した (Figure 1)。このモデルにおける暫定的な始点は青年期の《生き方の模索》、《外的要因による決定》あるいは《早期完了的》と考えられた。

青年期に《生き方の模索》あるいは《外的要因による決定》を通過した対象者の多くは、《役割獲得への

Table 3
対象者ごとのアイデンティティに関する内的テーマの推移

対象者 No.	青年期 a)	成人前期 b)	中年期 c)	老年期 d)
A	外的要因	努力→発揮	充実、不全	喪失→確固たる自分
B	外的要因	努力→発揮	充実	喪失→取り戻す→老いの不安
C	模索→外的要因	—	充実	取り戻す
D	早期完了→模索	努力	不全→変化→充実	喪失→取り戻す→取り戻せない自分、老いの不安
E	外的要因	努力	—	取り戻す→取り戻せない自分→老いの不安
F	模索	努力	変化→充実	喪失→確固たる自分
G	外的要因、模索	努力→発揮	充実	受け入れ→取り戻す→確固たる自分
H	外的要因	努力	変化→充実	喪失→自分らしさを取り戻す→取り戻せない自分→老いの不安
I	外的要因	—	充実	取り戻す→老いの不安
J	模索→外的要因	努力→発揮	変化→連続性→充実	喪失→自分らしさを取り戻す→確固たる自分→老いの不安
K	早期完了	情性→努力	変化→連続性	受け入れ→確固たる自分、取り戻せない自分、老いの不安
L	模索→外的要因	努力、発揮	変化	受け入れ→確固たる自分、取り戻せない自分
M	模索	努力	変化→連続性	喪失→取り戻す→確固たる自分、老いの不安
N	早期完了	情性→努力	不全→変化	喪失→確固たる自分
O	外的要因	発揮	不全→充実	受け入れ→老いの不安
P	外的要因→模索	努力、発揮	充実	喪失→取り戻す→受け入れ→老いの不安
Q	—	情性→努力	充実	喪失→取り戻す→受け入れ→確固たる自分、取り戻せない自分、老いの不安
R	外的要因	—	充実	受け入れ、取り戻す→取り戻せない自分、老いの不安
S	早期完了	情性→努力	充実	受け入れ、取り戻す
T	模索→外的要因	努力、発揮	変化→連続性	受け入れ→確固たる自分

注) ダッシュは語りが得られなかったことを意味する。また、「→」は明確な推移を、「,」は並行して存在することを意味する。

a) 「外的要因」は《外的要因による決定》、「模索」は《生き方の模索》、「早期完了」は《早期完了的》の略。

b) 「努力」は《役割獲得への努力》、「発揮」は《自分らしさの発揮》、「情性」は《情性的な役割獲得》の略。

c) 「充実」は《自分らしさへの充実感》、「連続性」は《連続性的実感》、「変化」は《内的・外的変化》、「不全」は《役割への不安全感》の略。

d) 「喪失」は《喪失を意識》、「確固たる自分」は《確固たる自分らしさ》、「受け入れ」は《変化する自分を受け入れる》、「取り戻す」は《自分らしさを取り戻す》、「取り戻せない自分」は《取り戻せない自分らしさへの固執》、「老いの不安」は《老いる自分への不安》の略。

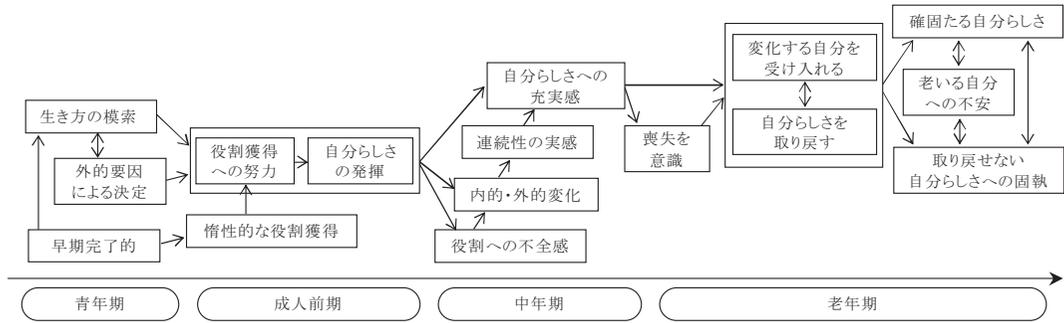


Figure 1. 青年期から老年期に至るアイデンティティの変容モデル

努力)もしくは《自分らしさの発揮》に移行した。この2個の上位カテゴリは、役割獲得に向けた努力をしている最中か、役割獲得に傾倒した結果という点では異なっている。しかし、役割を獲得するために、信念と行動を伴った傾倒をしているという点では同等の意味であると考えられたため、まとめて表記した。

また、青年期に《早期完結的》に該当し、その後に《生き方の模索》に移行しなかった3名の対象者は全員《惰性的な役割獲得》に移行していた。しかし《惰性的な役割獲得》に移行した後は、全員が《役割獲得への努力》に推移していた。したがって、《惰性的な役割獲得》からは《役割獲得への努力》に矢印を引いた。以上より、成人前期の終わりには、語りの得られた対象者17名全員が《役割獲得への努力》か《自分らしさの発揮》に該当していた。

しかしこの17名のうち、中年期に《自分らしさへの充実感》にそのまま移行した対象者は5名であり、その他の対象者は《内的・外的変化》か、何らかの形で《役割への不全感》に該当していた。さらに、《内的・外的変化》や《役割への不全感》に移行した後は、多くの対象者が《連続性の実感》を経るなどして、《自分らしさへの充実感》に至っていた。

老年期に至ると、《自分らしさへの充実感》からそのまま、あるいは《喪失を意識》を通過して、《変化する自分を受け入れる》または《自分らしさを取り戻す》に移行した。《変化する自分を受け入れる》と《自分らしさを取り戻す》は、老化していく自分への適応と、過去になれなかった自分を取り戻そうとする試みという点で異なっている。しかし、老年期におけるアイデンティティの再確立という点では共通の意味を持っているため、まとめて表記した。この2個の上位カテゴリを通過した後、《確固たる自分らしさ》あるいは《取り戻せない自分らしさへの固執》に移行する。しかしいずれの上位カテゴリに移行しても、《老いる自分への不安》に該当する可能性が示された。また、《確

固たる自分らしさ》と《取り戻せない自分らしさへの固執》に同時に該当する対象者も認められた。

考 察

高齢者の語りから捉えたアイデンティティ達成

アイデンティティは青年期の課題とされ、危機と傾倒によるアイデンティティ・ステータス論による評定などが行われてきた。しかし、本研究で得られた結果とアイデンティティ・ステータス論を比較すると、次の点が異なっていた。まず、《生き方の模索》とアイデンティティ達成を比較すると、《生き方の模索》の傾倒には行動が伴いにくかった。さらに本研究では、青年期にモラトリウムに類似したカテゴリが生成されず、《外的要因による決定》という、本研究独自の上位カテゴリが生成された。

《生き方の模索》の傾倒に行動が伴いにくかったことは、次の説明ができる。まず、本研究の対象者は青年期に行動を伴う傾倒が困難であっても、《役割獲得への努力》が示すように、成人前期において、行動を伴う傾倒がなされていた。このことから、アイデンティティの課題が青年期だけでなく、より広い発達段階にわたることを示唆した岡本(1986)の知見を支持するものと考えられる。また、《外的要因による決定》が示すように、進路選択において文化や慣習の影響が認められた。したがって、危機の経験と、行動は伴いにくいものの信念を持つという傾倒によって説明できる《生き方の模索》は、このコホートにおける青年期のアイデンティティ達成の様態であることが示唆される。ただし、高齢者の回想を用いたことが影響している可能性もあり、老年期において意識されるアイデンティティの達成は、より成熟した、すなわちより発達後期に確立されたアイデンティティであるとも推察される。

次に、本研究でモラトリウムに類似したカテゴリが

生成されなかったことと、《外的要因による決定》という独自のカテゴリが生成されたことについて考察する。これらの点は、上記の進路選択における文化や慣習の影響、すなわちこのコホートの特徴とも考えられる。しかし、中年期を対象とした研究であるが、本研究とほぼ同じコホートに対し、回想という手法を用いていた研究（岡本, 1985, 1986）では、モラトリアムは認められているが、《外的要因による決定》に類似した様態は認められていない。岡本（1985, 1986）の研究と本研究の相違を検討することには限界があるが、対象者の最終学歴と職業には明確な違いが指摘できる。本研究の対象者が、その他の要因があった可能性もあるが、家庭の経済状況や慣習のために、高校進学や大学進学を選択できなかったのに対し、岡本の対象者は、その多くが高校卒業以上であり、半数が大学卒業以上であった。また、職業も、本研究では男性は会社員が目立ち、女性は専業主婦あるいはパートであるのに対し、岡本の対象者は研究者や公務員、看護師であり、会社員であっても会社経営や会社役員が含まれていた。これらより、本研究で得られた結果の特徴が、コホートの影響だけでなく、学歴や職業といった対象者の個別の要因も影響しているものと考えられる。

喪失を意識することと、病への不安という危機

さて、老年期の危機は《喪失を意識》が示した通り、先行研究（Berger, 2006; 岡本, 1990; 岡本・山本, 1985）とほぼ同じ、関係の喪失、役割の喪失、身体的健康の喪失によって認められた。しかし、《老いる自分への不安》は、自身の将来という未知への不安であり、《喪失を意識》とは本質的に異なると推察された。Brorsson et al. (1998) は、何らかの初期治療を受けている高齢者に面接調査を行い、アイデンティティの変容に大きな影響を与える要因として、病気のうち、特に障害を伴うものや、身体的、環境的な自律が阻害される病気を患うことへの不安が高かったと指摘している。この知見を踏まえると、身体的健康の危機には、中年期からの身体的健康の変化を感じることで、より重篤な病気にかかることへの不安が存在している可能性が示唆される。

さらに、《老いる自分への不安》は、《変化する自分を受け入れる》というカテゴリを通過した対象者にも多く認められたことから、老年期のアイデンティティの変容は、慢性的な課題を抱えるか、あるいは明確な達成が困難な課題を含むなど、完結という形を取りづらいものと推察される。

老年期における自分らしさの再構成の試み

先述の通り、青年期に主体的な選択が外的要因のた

めに困難であった対象者においても、成人前期に新しい役割を獲得するための傾倒がなされ、アイデンティティ達成と同等の様態が認められることが示唆された。そしてその後の発達段階においても、《外的要因による決定》を通過したことに対する葛藤は顕著には認められなかった。しかし、老年期に至って《取り戻せない自分らしさへの固執》というカテゴリが生成され、さらにこのカテゴリと《確固たる自分らしさ》との併存が認められた。これらより、老年期になって、これまでの自分らしさや人生の選択に関する葛藤に再び取り組もうとする試みが出現することが示唆された。Hulbert & Lens (1988) は、高齢者にとって意味ある自己のアイデンティティ感覚の持ち方は、過去から未来にわたる諸経験の統合の仕方、すなわち時間的展望と関連していると指摘した。また岡本(1998)も、老年期のアイデンティティを、これまでの心理社会的課題が再吟味され、それらが統合されたものと考察している。本研究で示された、過去になれなかった自分を現在の自分が取り戻そうとする作業は、これらのことを実証的に示したものと考えられる。

今後の課題

本研究ではごく限られた対象者に行った調査であるため、変容モデルやその推移の一般化には限界がある。特に、先行研究との比較の中で、コホートだけでなく学歴や経済状況、職業の影響も示唆された。今後はこれらの点を踏まえて対象者を広げ、調査内容や分析方法を精緻化しながら、本研究で得られた結果について検討する必要がある。

【注】

- 1) 本調査は深瀬・岡本（2010a, b）、深瀬・岡本（印刷中）と同じ対象者に対し、同じ時期に行ったものである。

【引用文献】

- Berger, E. D. (2006). 'Aging' identities: Degradation and negotiation in the search for employment. *Journal of Aging Studies*, 20, 303-316.
- Brorsson, A., Lindbladh, E., & Råstam, L. (1998). Fears of disease and disability in elderly primary health care patients. *Patient Education and Counseling*, 34, 75-81.
- Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society*. New York: W. W. Norton.
- (エリクソン, E. H. 仁科弥生 (訳) (1977, 1980). 幼児

- 期と社会1, 2 みすず書房)
- Erikson, E. H., Erikson, J. M., & Kivnick, H. Q. (1986). *Vital involvement in old age*. New York: W. W. Norton.
- (エリクソン, E. H., エリクソン, J. M., & キヴニック, H. Q. 朝長正徳・朝長梨枝子 (訳) (1990). 老年期—生き生きしたかかわりあい— みすず書房)
- 深瀬裕子・岡本祐子 (2010a). 老年期における心理社会的課題の特質— Erikson による精神分析的個体発達分化の図式 第Ⅷ段階の再検討— 発達心理学研究, **21**, 266-278.
- 深瀬裕子・岡本祐子 (2010b). 中年期から老年期に至る世代継承性の変容 広島大学大学院教育学研究科紀要 第Ⅲ部 教育人間科学関連領域, **59**, 145-152.
- 深瀬裕子・岡本祐子 (印刷中). 高齢者の語りに基づく母親の人物との相互性の変容 発達心理学研究.
- Harris, R. (1975). Maintaining the geriatric patient's identity. *New York State Journal of Medicine*, **75**, 1252-1255.
- Hulbert, R. J., & Lens, W. (1988). Time and self-identity in later life. *International Journal of Aging and Human Development*, **27**, 293-303.
- 小嶋由香 (2004). 脊髄損傷者の障害受容過程—受傷時の発達段階との関連から— 心理臨床学研究, **22**, 417-428.
- Marcia, J. E. (1966). Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, **3**, 551-558.
- 松本 学 (2009). 口唇裂口蓋裂者の自己の意味づけの特徴 発達心理学研究, **20**, 234-242.
- 宮下一博 (1987). Rasmussen の自我同一性尺度の日本語版の検討 教育心理学研究, **35**, 253-258.
- 無籐清子 (1979). 「自我同一性地位面接」の検討と大
 学生の自我同一性 教育心理学研究, **3**, 178-187.
- 中西信男・佐方哲彦 (2001). EPSI—エリクソン心理社会的段階目録検査— 上里一郎 (監修) 心理アセスメントハンドブック (第2版) 西村書店 pp.365-376.
- Ogilvie, D. M. (1987). Life satisfaction and identity structure in late middle-aged men and women. *Psychology and Aging*, **2**, 217-224.
- 岡本祐子 (1985). 中年期の自我同一性に関する研究 教育心理学研究, **33**, 295-306.
- 岡本祐子 (1986). 成人期における自我同一性ステータスの発達経路の分析 教育心理学研究, **34**, 352-358.
- 岡本祐子 (1990). 高齢者の死の受容と自我同一性に関する研究 広島中央女子短期大学紀要, **27**, 5-12.
- 岡本祐子 (1994). 成人期における自我同一性の発達過程とその要因に関する研究 風間書房
- 岡本祐子 (1998). 現役引退危機から見た老年期のアイデンティティ状態と心理社会的課題達成の特徴 広島大学教育学部紀要 第二部 文化教育開発関連領域, **47**, 141-148.
- 岡本祐子・山本多喜司 (1985). 定年退職期の自我同一性に関する研究 教育心理学研究, **33**, 185-194.
- Peck, R. C. (1955). Psychological development in the second half of life. In B. L. Neugarten (Ed.), (1968). *Middle age and aging*. Chicago: University of Chicago Press. 88-92.
- Rasmussen, E. (1964). Relationship of ego identity to psychosocial effectiveness. *Psychological Reports*, **15**, 815-825.
- 谷 冬彦 (2001). 青年期における同一性の感覚の構造—多次元自我同一性尺度 (MEIS) の作成— 教育心理学研究, **49**, 265-273.